主人と奥さん

どんより曇った寒い日
赤ん坊を背負った奥さんが
主人にぴったりとくっついて歩いていった
僕たちは国道に一斉に並んで
小さな日の丸を振って見送った

駅までは三キロばかり

先頭は
ラッパを吹いて歩き
その後ろには
軍服を着た主人たちが続いた

昭和十六年十二月
兵舎にいた
三千人の兵隊さんが
総て出ていった

『主人と奥さん』コメント

外国語学部国際文化交流学科　四年　柳下弘行

この詩は、以前祖父から聞いた話を元に書きました。

私の祖父と祖母は、５０代になって、一家揃って横浜に引っ越してくるまで、ずっと鹿児島で生きてきた人間です。昭和七年生まれの祖父は幼かったために戦場にはいっていませんが、子供ながら当時の戦時色一色の国の様子に疑問を持っていたと言っています。

そして、その祖父にとって一番忘れがたいのが、昭和十六年十二月に太平洋戦争が始まってすぐ、宿舎から三千人の兵が総て出ていった時の光景だったと言っており、今回はその様子を詩にしました。

祖父の通っていた小学校は兵舎から川を隔てたところにあって、直線距離で１００ｍほどしか離れていなかったそうです。そのため、兵が出征する時は、詩に書いたように、国道に一斉に並んで、小さな日の丸を振って見送ったと言います。

そして、開戦直後、見送られる兵隊の中に、年をとった兵と、生まれて間もない子供を背負おう妻が、ぴったりとくっついて、歩いていく様子を見て、日本は大丈夫かなと思ったりもしたと、祖父は言っていました。

外国語学部
国際文化交流学科４年
柳下　弘行